ヘーゲルの人間學の性格（上）

——體系におけるその地位——

船山信一

（上）

(一) ヘーゲル哲學における二つの體系
——『エンチュクロペディー』と「發展におけるヘーゲル哲學」——
(二) 現象學の三重性格
——學への道・本質學・意識學——
(三) 人間學の對象
——心または自然精神——

（下）

(四) 人間學と現象學との關係
——精神哲學においては人間學が(小)現象學に先行しているが(大)現象學においてはそうではない——
(五) 形式及び疾病としての人間學的なもの
——ヘーゲルの人間學の否定的性格——
(六) ヘーゲルの人間學の肯定的側面
——本質學から意識學及び現實學への轉化——

一　ヘーゲル哲學における二つの體系

――『エンチュクロペディー』と「発展におけるヘーゲル哲学」――

ヘーゲル哲學の體系といえば、もちろんまず、『エンチュクロペディー』が考えられる。即ち、論理學→自然哲學→精神哲學という構成がそれである。そしてそのうち、とくに精神哲學についていえば、これはさらに主觀的精神・客觀的精神・絶對的精神の三部門にわかれ、しかも主觀的精神は人間學（心または自然精神）・現象學（意識または現象する精神）・心理學（精神）の三段階をもち、客觀的精神は法・道德性・人倫性の三段階をもち、且つ兩者は有限な精神であるに對して、藝術（『ハイデルベルヒ・エンチュクロペディー』においては藝術の宗教）・宗教（啓示された宗教）・哲學の三段階をもつているところの絶對的精神は無限な精神であるといわれている。我々はまたここで、『エンチュクロペディー』における論理學（いわゆる小論理學）が存在論・本質論、概念論の三部門をもつていることを附け加えて置こう。（大論理學においては概念論が主觀的論理學として、客觀的論理学としての存在論及び本質論に對立させられているが、このような規定は小論理學においては見出されない）(1)

ヘーゲルの哲學體系といえば、このようにまず『エンチュクロペディー』の體系が、しかもただそれだけで全體系をなすものと考えられている。そしてこの體系は論理學を中心・出發點とする體系、あるいは論理的立場における體系である。ところでヘーゲルにおいては論理的立場とは絶對知の立場・意識とその對象との對立を克服した立場・思惟と存在との同一性の立場である。かくてヘーゲルにおいては論理學は同時に存在論・形而上學であった。ヘーゲルは自己の哲學の立場であるところの論理學・形而上學を學そのものとして、彼がカントやフィヒテの哲學がそれであるとなすところの現象學――學への道――の立場から明確に區別する。然しまた一方ヘーゲルにおいては、「現實的なものは理性的であり、理性的なものは現實的である」という有名な主張において示されているように、理性的と現

實的との一致、卽ち本質と現實との一致がある。そしてとくに『エンチュクロペディー』の體系はどこまでもこの、本質と現實との一致の立場、あるいはむしろ現實を本質に還元する立場、または少くとも現實を本質の外化と考える立場に止つている。ここに、あくまでも現實に止ろうとする立場、あるいは本質を現實からの抽象と考える立場に立つ、フォイエルバッハやマルクスの立場と、ヘーゲルの立場との相違點がある。客觀的現實存在ではなく主體的實存の立場に立とうとするキェルケゴールの立場もヘーゲルの本質的立場と對照的であることも明白であろう。

もちろんヘーゲルは、イェナ時代の體系においては、論理學・形而上學に對立し、後に自然哲學や精神哲學となるところの、實在哲學（Real-philosophie）を考えていたし、『エンチュクロペディー』においては自然哲學と精神哲學とを確立するという形で、實在的なもの・現實的なものの哲學をもつていた。然し例えば後者の場合ヘーゲルは、「理念そのものの學」としての論理學に對し、自然哲學と精神哲學とをそれぞれ、「自己の他在のなかにある理念の學」及び「自己の他在から自己へ還歸する理念の學」として規定しているのであるから、ヘーゲルにおいては現實的なものも論理的なものと同一なものとして、あるいは論理的なものの外化、疎外・實現として考えられ、從つて單に論理學のみならず自然哲學及び精神哲學もまた、從つて『エンチュクロペディー』全體が論理的立場において考えられていることは確實であろう。

つまり、『エンチュクロペディー』におけるヘーゲル哲學の體系は、論理的本質的立場における、そしてそこから脫け出ないところの哲學體系の立場なのである。

さて次に、『エンチュクロペディー』の體系、論理的本質的立場に立つ體系のほかに、我々はヘーゲル哲學の體系を考え得ないであろうか、考え得るとすればそれはいかなるものであろうか。そのためには我々はヘーゲル哲學を全體として、しかもその發展において考えなければならない。そしてそれはまた、本質的論理的立場の外に出ることを可能にするであろう。そのような研究の手がかりとなるものは、『精神の現象學』であり、またそれと『論理學』と

の關係である。この問題を離れてはヘーゲル哲學體系の研究は不可能である。

『エンチュクロペディー』は直接に（學そのものとしての）論理學（小論理學）から出發しているに對して、『論理學』（大論理學）においては「學そのもの」としての自己（論理學）の前に、「學への道」・「學への入門」・「學の概念」・「學の生成」、即ち『精神の現象學』が考えられている。もちろんこの場合、「學そのもの」が單に論理學を指すだけであるか、あるいは論理學→自然哲學→精神哲學という『エンチュクロペディー』全體の體系を指すものであるか。ここには一つの問題がある。そしてこれは、ヘーゲルが『精神の現象學』の第一版においてそれを哲學體系の第一部として規定したとき、第二部として何を考えていたか、即ち單に論理學だけを考えていたか、あるいは自然哲學や精神哲學をも含めて考えていたか、または第二部としては論理學を考え、自然哲學や精神哲學を實在哲學として第三部を考えていたか、さらにはこれらをそれぞれ第三部、第四部と考えていたかという問題と關連する。(2) 然しいずれにしても、ヘーゲルがこの場合、精神の現象學とその他の學（論理學その他）との區別は明確に考えていたが、論理學とその他の學――實在哲學（自然哲學・精神哲學）――との區別は明確に考えていなかつたことはたしかである。このことは、本質的論理的立場と現實的立場とを區別しない、あるいは現實的なものを本質的論理的なものを基礎として考えるということの當然の歸結なのである。然しそれにしても、『論理學』（大論理學）及び『精神の現象學』においては、『エンチュクロペディー』においてとは異つて、學そのものに對して學への道・學への入門・學の概念・學の生成としての精神の現象學が獨立に考えられていたということは、『精神の現象學』や『論理學』において考えられている體系、あるいはこれらのものを包括する體系、さらにはこれらのものの發展の間において成立している體系（私はそれを「發展におけるヘーゲル哲學」、その一部と考えたい）が、『エンチュクロペディー』において考えられている體系とは別のものであることを示しているものであつて、ヘーゲルの體系を考える場合に非常に重要なことなのである。

學そのもの・論理學・本質學に對しては、一方において學への道としての（精神の）現象學・意識學が考えられる

と共に、他方においては現實學が考えられる。それが實在哲學としての自然哲學及び精神哲學であるか、あるいはこれらもまた本質學であつて、現實學としては他のもの、とくに歴史哲學または歴史（哲學史等々）が考えられなければならないか。これは一つの問題である。ヘーゲルの『エンチュクロペディー』においては、現實學が本質學と獨立には考えられていないにしても、しかもなおそこには歴史哲學があり、またヘーゲルにおいては歴史的なものと論理的なものとの一致により、哲學や論理學が歴史的にとらえられており、とくに哲學は哲學史としてとらえられている。哲學史講義はもとより歴史であり、宗教哲學講義、美學講義も宗教史、藝術史という性格をもつている。このようにヘーゲルにおいては現實學、歴史（歴史哲學及び哲學史等々）への志向があり、論理學そのものさえ歴史的にとらえられているのである。いな、ヘーゲルにおいては意識學としての（精神の）現象學さえ、一方においては論理的にとらえられていると共に、他方においては歴史的にとらえられているのである。ただしヘーゲルにおいては、論理的なものが歴史的なものからの抽象としてとらえられず、逆に歴史的なものが論理的なものの外化、疎外・實現としてとらえられている。そしてそれは丁度、ヘーゲルにおいては學そのものたる本質學としての論理學に對して學への道たる意識學としての（精神の）現象學が考えられているにもかかわらず、（精神の）現象學が論理學へ吸收され、精神の現象學がそれ自身論理學的に考えられているのと同様である。(3)

然しそれにしてもヘーゲル哲學の體系において、論理學→自然哲學→精神哲學という『エンチュクロペディー』の體系のほかに、精神の現象學→論理學（及び自然哲學・精神哲學、つまり『エンチュクロペディー』全體）→歴史（歴史哲學及び哲學史等々）という體系を考えることができる。これはヘーゲル哲學の「發展における體系」というべきであろう。(4) それはたとえ、ヘーゲル自身の意識した體系、System für sich、あるいは或る時期――それが完成したヘーゲルであつてもかまわない――における體系ではなくとも、System an sich、そのためにかえつていわばあるべきヘーゲルの體系ともいえるものであろう。哲學史卽哲學（哲學の體系）というヘーゲルの考え方を、ヘーゲル自

身に適用して考えれば、ヘーゲル哲學の發展をヘーゲルの哲學體系と考えること、つまりヘーゲルの許に「發展における體系」を考えること、少くともそれを一定の時期の――あるいは完成した――ヘーゲルの哲學體系と竝べて考えること、さらには後者をも前者との連關において考えることは、單に可能なことであるばかりではなくして、むしろ必要なことであるというべきであろう。

ヘーゲルにおいて私が「發展における哲學（體系）」と呼ぶものがはたして體系と呼ぶことができるかどうか、またそれを體系と呼ぶ場合に意識學・本質學・現實學の構造の觀點から解釋することはもちろんのこと、批判することさえも、いろいろな問題を含んでいよう。然し、ヘーゲルに『エンチュクロペディー』の體系以外にもう一つの體系があり、そしてヘーゲルの人間學、現象學、さらに論理學の性格はその體系を豫想して始めて正しくとらえられ、また逆に、人間學・現象學・論理學の性格を明らかにすることはその體系を浮刻する上に大いに役立つであろう。それに對し『エンチュクロペディー』の體系はもつぱら本質學の立場に立ち、意識學や現實學をも本質學の立場から考えようとするものである。(5)

我々はヘーゲル哲學の體系について語る場合、このように、『エンチュクロペディー』における體系のほかに、ヘーゲル哲學の發展（もちろんヘーゲル自身における）そのものがそれ自身一つの體系であること、そしてそれは意識學―本質學―現實學という體系であること、少くともそういう風に解釋し且つそういうものへ轉化し得ること、そして『エンチュクロペディー』は一方においては單に或る時期の――あるいは完成した――ヘーゲルの體系に過ぎず、他方においては意識學―本質學―現實學のうちの本質學の立場の、あるいは少くとも本質學を中心とした體系であることを認識しなければならない。「發展におけるヘーゲル哲學の體系」は單にそれ自體としてその存在と意義とを認めることが必要であるばかりではなく、『エンチュクロペディー』における體系の眞の意味及びその限界をとらえるために、從つてまたそれを批判するためにも、「發展における體系」の存在と理解とが前提されなければならないの

である。もし『エンチュクロペディー』の體系によつヘーゲル哲學の體系がつくされると考えられならば、それは大いなる誤りである。

(1) 『プロペドイティーク』におけるエンチュクロペディーの論理學においては存在論と本質論とが「存在論的論理學」として一括され、概念論は逆に「主觀的論理學」と「理念論」とに分割されているのが特色である。ただし『プロペドイティーク』においても獨立の論理學の方は存在論と本質論と概念論とに別れている。

なお『プロペドイティーク』の精神哲學——ここでは自然哲學が自然學となつていると同樣、精神哲學も精神學となつている——においては主觀的精神は「自己の概念における精神」となり、客觀的精神は「實踐的精神」となり、絶對的精神は「自己の純粋な敍述における精神」となつている。

さらに『ハイデルベルヒ・エンチュクロペディー』の精神哲學においては、客觀的精神のうちの人倫性が直接に個別的民族・對外法・普遍的世界歴史に別れているが、これは、これらのものが『ベルリン・エンチュクロペディー』においては國家に該當するものであり、且つ『ベルリン・エンチュクロペディー』においては人倫性が國家のほかに家族・市民的社會を含んでいることと違つている點である。

『プロペドイティーク』や『ハイデルベルヒ・エンチュクロペディー』における論理學や精神哲學の構成を一方においては『ベルリン・エンチュクロペディー』や『大論理學』のそれと比較し他方においてはイエナ時代の論理學＝形而上學や實在哲學の構成と比較して見ることは、それ自身一つの大きな問題を構成するであろう。

(2) ヘーリングはヘーゲルが『精神の現象學』を書く際に最初、體系の第一卷として「入門」(Einleitung) 及び「論理學」を考え、且つ「入門」は理性のところで止めるつもりであつたといつている。もしそうとすれば、これを裏からいえばヘーゲルはそのとき「論理學」を理性の立場で考え絶對知の立場で考えていなかつたことになるのである。そしてまたヘーゲルがそのとき考えていた「入門」の範圍は『エンチュクロペディー』における「現象學」の範圍と同じであつた。然し當時「入門」はどこまでも入門として、學への道として考えられておつた。そこに、ヘーゲルが當初考えていた「入門」と、『エンチュクロペディー』における「現象學」との性格的相違がある。何故なら後者は學への道ではなくて、どこまでも學そのものの一段階とされているからである。

ヘーゲルがもし、ヘーリングのいうように、當初理性から論理學につづくと考えていたとすれば、それは絶對知から(大)

論理學へつづけた後の考え方とは基本的に異る。そこには單に、精神（または理性）の現象學と絶對的精神（または絶對知）の現象學との相違が見られるだけでなく、「心理的及び論理的法則」の學としての論理學、心理學的論理學、心理學、理性の論理學と、絶對知の論理學、思惟と存在との同一性の立場に立つ論理學、存在論、論理學＝形而上學、「自然及び有限な精神の創造以前に自己の永遠な本質においてあるところの神の敍述」としての論理學との相違が見られる。

然しヘーリングがいうようにヘーゲルは間もなく體系の第一卷から「論理學」を除くことによつて、「入門」は理性の段階からさらに絶對知にまで進み、一方において入門としては心理學への入門ではなく論理學＝形而上學・「自然及び有限な精神の創造以前に自己の純粹な本質においてあるところの神の敍述」への入門となり、他方において入門を越えて學そのもの、しかも體系の一部ではなく一つの全體系、つまり精神のあらゆる現象の學、意識學としての學そのものとなつた。そしてヘーリングによれば、入門が自己目的となつたときに始めて『精神の現象學』という名前が現われたのであるが、このことはヘーゲルの『精神の現象學』が元々『エンチュクロペディー』における「現象學」、つまり「心理學」の前段階としての・學そのものの一部としての「現象學」ではなく、また「心理學」への、もしくはヘーゲルが當初考えていたところの（心理學的）論理學への入門でもなく、入門としては論理學＝形而上學への、卽ち「自然及び有限な精神の創造以前に自己の純粹な本質においてあるところの神の敍述」への入門であり、學そのものとしては精神のあらゆる現象の學、絶對的精神の自己意識の學としての意識學であるということを示している。これがヘーリングのいう「現象學の二重性格」である。そして『（大）論理學』の「結論」においては『精神の現象學』は論理學＝形而上學としての學そのものへの道であるという面が强調されている。それに反してでき上つた『精神の現象學』においては絶對的精神の自己意識の學としての學そのもの、意識學という面が强く出ている。『エンチュクロペディー』における「現象學」は、ヘーゲルが當初「心理學」・論理學・または心理學的論理學への入門として考えたものが、學そのものとして本質學としての精神哲學の一段階とされたものである。ヘーリングは『（大）現象學』をただそれだけとして見たために「現象學の二重性格」といつたのであるが、この場合さらに『エンチュクロペディー』における「（小）現象學」を附け加えて考えるならば、われわれは「現象學の三重性格」ということができるし、またいわなければならないであろう。

この註に關しては Th. L. Haering: Hegel, sein Wollen und sein Werk, II. Band, S. 478-483. 參照。

（3）フォイエルバッハはヘーゲルの『論理學』の出發點をなしている存在が實は思惟と同一な存在であることによつて存在ではなく思惟であることを指摘している。フォイエルバッハはもちろんその際これに對して、なるほどヘーゲルの『論理學』

における存在は思惟であるかもしれないけれども、『精神の現象學』における出發點たる感性的確實性は普遍的なもの・思惟ではなくて、個別的なもの・正に感性的なもの、卽ち存在であるといつてヘーゲルを辯護する人があることを豫想している。然しその人に對してフォイエルバッハは、感性的確實性においてヘーゲルが眞理として認めるものは今・ここ・このものという普遍的なもの、概念・思惟であつて、決して個別的なもの、感性的なもの、つまり存在ではないといつて反駁している。かくてフォイエルバッハは端的にヘーゲルにおいては「現象學は現象學的論理學以外の何ものでもない。」と斷言している。これはヘーゲルの『精神の現象學』に對するまことに適切な批判であろう。(Ludwig Feuerbachs Sämmtliche Werke, herausgegeben von Bolin und Jodl, II, Philosophische Kritiken und Grundsätze, S. 187. 佐野文夫譯『ヘーゲル哲學の批判』——岩波文庫——四五頁)然しフォイエルバッハがヘーゲルの『論理學』や『精神の現象學』に對する批判から、一方においては論理學——一般に本質學——の否定を引き出し、そして他方においては意識學と現實學との混同——彼の人間學はこのような否定的一面をもつていることは否定できない——を歸結したということは彼の哲學の致命的な缺陷といわなければならない。フォイエルバッハはこのために、現實的なもの——及び意識——における發展からの抽象としての本質的論理的なものがもつている積極的意義を汲み取ることができなかつたし、またヘーゲルにおいてはたとえ歪められたとはいえ、また一部分は(卽ち現實學に關していえば)獨立性を認められなかつたとはいえ、とにかく成立していた現象學→論理學→現實學という體系が——もちろん別の構成において、——單に成立することができなかつたばかりでなく、問題にさえもされなかつた。

(4) ヘーゲル哲學の體系、とくに「發展における體系」については構造的にもつと立ち入つた解釋と批判とが必要であり、それにはまたヘーゲル哲學の成立・發展に關する、及びこの問題についての諸家の說に關する研究に待たなければならない。然しそれは本稿の主題に屬さないので、本稿での論及は後に說くことの前提として必要な範圍に止めた。

ただ私はここで、ヘーゲルが『エンチュクロペディー』の「哲學」のなかでのべているところの三つの推論の本質を明らかにすることは、ヘーゲルの哲學體系の解釋及び批判に對して大きな照明を與えることだけは附け加えておきたい。

「哲學の推論」のうち第一の推論、卽ち論理的理念(L)→自然(N)→精神(G)という推論は『論理學』の立場、または『論理學』を中心とする『エンチュクロペディー』の立場を表現するものであり、第二の推論、卽ち自然(N)→精神(G)→論理的理念(L)という推論は『精神の現象學』の立場、または『精神の現象學』と『論理學』との關係を表現するものである。それに對して第三の推論、卽ち精神(G)→論理的理念(L)→自然(N)という推論は哲學そのものの推論とされている。然し

ヘーゲルにおいてはこの第三の推論は最も了解しにくいものであり、そしてそのことは彼の立場そのもの、體系に關する彼の考え方に基づくものと私は考える。第三の推論はヘーゲルとは異つた立場において始めて合理的意義を認められる。また、L→N→Gが第一の推論、N→G→Lが第二の推論、G→L→Nが第三の推論とされていることも、ヘーゲルの立場、體系に關するヘーゲルの考えに基づいていることであつて、別の立場、體系に關する別の考え方のもとでは別の構成が考えられるのである。そしてその際は第一の推論や第二の推論もヘーゲルの場合とは異つた意味をもつて來るであろう。いな、ヘーゲル自身においても、今のべた推論の構造及び體系は、『エンチュクロペディー』における體系のものであつて、「發展における體系」または『精神の現象學』→『論理學』(『エンチュクロペディー』全體)→『歴史哲學』(及び哲學史等々)の體系においては推論における別の體系、さらには少くとも部分的には別の構造が成立するであろう。(後記――この問題については、執筆は本稿よりも後であるが、発表は前になつたところの、『立命館大學文學部創設三十周年記念論集』中の「ヘーゲルにおける哲學の推論」參照)

(5) 私がここでいう意識學・本質學・現實學はとくにヘーゲル及びフォイエルバッハ、マルクスから學んだものである。その大體は拙著『哲學概論』――とくに第三章六及び第五章五――から理解してもらえると思う。ヘーゲル哲學體系、とくに「發展における體系」の究明は、この三つの學の關係の理解によつて進められ、また逆にヘーゲル哲學體系、とくに「發展における體系」の究明は、三つの學の關係の理解を進めるであろう。ヘーゲルにおいては精神の現象學が意識學であり、論理學が本質學であるに對し、歴史哲學は本來現實學であるべきである。

二　現象學の三重性格

――學への道・本質學・意識學――

精神の現象學は學への道、學への入門、學の概念、學の生成であると共に、またそれ自身學である。然し精神の現象學がそれ自身學であるということは、いろいろの意味において考えられる。

第一に、精神の現象學は論理學にとつて外的なものではなく、また精神の現象學の端初(感性的確實性)から終端(絶對知)に到るまでの發展が必然的なものであるということである。我々は直接に論理學――學そのもの――の端

初（絶對知）に立てるのではなくて、絶對知の生成を跡づけなければならない。このように、學への道が不可缺であり、しかも単に學そのものの端初が必然的であるばかりではなくて、學への道の端初（感性的確實性）及び學への道の端初からの學への道の終端・學そのものの端初への發展が必然的なものでなければならない。ところでこのような役割をはたすものは精神の現象學であり、しかもそれがそれ自身學である。つまりここでは學への道が正に學への道としてそれ自身が學なのである。學への道は不可缺であり、且つそれ自身學でなければならない。學への道がないということ、及びあってもそれが必然性をもっていないといふことは、共に、學そのものが基礎づけをもたないということなのである。

學への道としての現象學が正にそのものとして學であるというヘーゲルの考え方は、哲學を缺いていて単に現象學に過ぎないというカント・フィヒテの反省哲學、學への道をもたずに直接に哲學を說くヤコービ・シェリングの直觀哲學、及び學への道をもつていてもそれを主觀的偶然的として考え、從つて學として考えないいわば常識の立場は、いずれもヘーゲルがしりぞけたものであつた。

かくて精神の現象學が學そのものであるということの第一の意味は、それが正に學への道として學であるということである。

第二に、ヘーゲル・『エンチュクロペディー』においては精神の現象學は學そのもの、そのうちの精神哲學、そのうちの主觀的精神の一部・第二段階としてとらえられている。學への道は學への道であると共に、それ自身が學・學そのものの一段階なのである。精神哲學における現象學がこのような地位にあるものである。そして我々は學への道としての精神の現象學を大現象學と呼び、學そのもの・その一部としての精神の現象學、卽ち精神哲學における現象學を小現象學と呼ぶことができよう。

ところで大現象學と小現象學とでは對象の範圍が違う。大現象學では意識（感性的確實性・知覺・悟性）・自己意

識・理性・精神・宗教・絶對知の八段階（または六段階）が考えられているに對し、小現象學ではただ意識（感性的確實性・知覺・悟性）・自己意識・理性の各段階が考えられているだけである。[1] 然しこれは、単純に大現象學が小現象學へ縮小されたと考えられるべきではなくて、學への道としての現象學と學そのもの――そのうちの精神哲學――の一部門としての現象學との性格の相違として考えられるべきである。現象學は學への道としては単に意識の現象學ではなくて正に精神の現象學であつたが、學そのもの・その一部としての現象學は精神の現象學・精神全體の現象學ではなくて、意識の現象學・現象する精神の學・現象としての精神の學である。精神そのものの學はすでに心理學等々である。學への道としては精神の全領域を包括するものも學そのものとしてはその一部にはめ込まれる。そしてまた學への道もそれ自身が學そのものの發展の一部としてそのなかへ吸收されるのである。『エンチュクロペディー』における現象學は正にこのような性格、從つてまた正にこのような範圍をもつている。

第三に現象學は、單に學への道であるばかりではなく、また單に學そのもの、その一部門であるばかりではなくて、それ自身學そのもの、しかも一つの體系である。ヘーゲルにおける精神の現象學はまたこのようなものとしても考えられなければならない。このような立場に立つて考えれば、精神の現象學は單に學への道ではなく、また學そのものの一部門でもなくて、學そのものの全對象が意識に對して現われた形なのである。

『精神の現象學』が體系から引き離されてただそれだけで考察されるときはもつぱら學そのもの、意識學としての學そのもの、しかも最高・さらには唯一の學そのものとなる。非合理主義、生哲學の立場からの『精神の現象學』の解釋はこのようなものである。『精神の現象學』を單に學への道とだけ見て、同時に學そのもの、意識學としての學そのものとして見なければ、『精神の現象學』は哲學ではなくなるが、しかし『精神の現象學』をただそれだけとして見て、體系におけるその地位を見なければ、『精神の現象學』の性格が正しくとらえられない。現代の觀念論者が多く、『精神の現象學』をもつぱらそのものとして考察するに對し、現代の唯物論者は多く、學への道としても、また學そのも

のとしても、『精神の現象學』を顧慮しない傾きがある。[2] かくて前の場合には論理學が忘れられ、後の場合にはそれと『精神の現象學』との連關が忘れられる。

ヘーリングは(大)現象學を個別的精神（感性的確實性・知覺・悟性・自己意識・理性）・客觀的精神（精神）・絶對的精神（宗教・絶對知）に別けている。[3] これは(大)現象學を精神哲學に對應させ、前者の段階を後者の段階（主觀的精神・客觀的精神・絶對的精神）に對應させたやり方である。然しここでは精神哲學のうちの人間學に對應する部分が(大)現象學に見出されていない。ヘーリングが個別的精神といつて主觀的精神といわないゆえんもここにあろう。然し眞實には、單に精神哲學――そしてもとよりその全體――だけでなく、自然哲學も、そしてさらに論理學も、つまり『エンチュクロペディー』全體が、精神の現象學のいずれかの段階に対應しなければならない。実際、論理學は絶對知のなかに含まれていると考えられるし、自然はたとえばとくに「觀察する理性」の對象になつているし、人間學における身體も精神の骨相學的人相學的表現としてやはり同じく「觀察する理性」の對象になつている。つまり、(大)現象學における主體的側面はどこまでも意識の立場であるが、對象的側面は『エンチュクロペディー』全體の對象界なのである。理念・自然及び精神が意識に對して現われた姿を敍述するのが(大)現象學である。このような現象學は決して單に意識・自己意識・理性だけを含むような小現象學ではあり得ず、その上精神・宗教・絶對知を含むところの正に大現象學でなければならない。それは單に現象學・意識の現象學ではなくてとくに精神の現象學でなくてはならない。いいかえればここでいう現象學においては、主體はどこまでも意識である――だからそれは現象學である――が、對象は單なる意識ではなくて精神なのである――だからそれは精神の現象學である――。精神全體が――從つてまた自然も理念も含めて――意識に對して現われる姿が精神の現象學である。精神の現象學はこのように意識學として學そのものである。それは單に學への道・學への入門・學の概念・學の生成として學なのではなく、また學そのものの單なる一段階としての學なのでもない。意識學としての精神の現象學の對象は、本質學・論理學の對象で

あり、また現實學の對象でもあるところの同一の全體的眞理が意識に對して現われたものであつて、三者はただ眞理の存在の仕方の區別に過ぎず、價値の段階を示すものではなく、また全體と部分・目標と過程という區別を示すものでもない。精神の現象學はその對象からいつては論理學（本質學）や現實學とその價値を同じくし、またその範圍を等しくするところの學そのものであり體系そのものである。それ自身體系であるということはヘーゲルの現象學に特有な一面である。

ヘーゲルの精神の現象學はこのように三重の性格をもち、從つてそれが學であるということも三つの意味をもつている。そしてヘーゲルにおいては、學そのもの――本質學・精神哲學・『エンチュクロペディー』――の一部門としての現象學は他の二つの意味の現象學とその範圍を異にしている。それに對しヘーゲルにおいては學への道としての現象學は意識學としての現象學と全く一致する。精神の現象學が第一版において哲學體系第一部として明確に規定されながら、第二版においてはそれが削除されたということは、一方においてはヘーゲルが第二版において直接に學そのもの――論理學――の立場に立ち、そこから現象學を見たことを示すものであると共に、他方においては精神の現象學が意識學としての學そのものになつたということを示すものであろう。そしてこの二つのことを可能にしたものは、精神の現象學の終端が絶對知であるということである。何故なら、絶對知は一方においては直接に「自然及び有限精神の創造以前に自己の純粋な本質においてあるところの神の敍述」としての論理學を可能にし、他方においては精神の現象學そのものをたとえ意識學であつても絶對者の意識學として可能にするものであるからである。そして絶對者の意識學とは實は「自然及び有限精神の創造以前に自己の純粋な本質においてあるところの神の敍述」としての論理學、卽ち神の本質學と一致する。いな、絶對者・神においては意識學・本質學・及び現實學は完全に一致するのである。意識學と學への道とが相覆的でないためには、學への道の終端が絶對知であつてはならないのである。そしてまた、學への道の終端が絶對知でなければ、本質學と現實學との一致、後者の前者への還元が基礎づけられないのであ

る。ヘーゲルはたしかに、精神の(小)現象學を精神哲學の一部門にしてはいるが、しかしヘーゲルにおいては逆に精神哲學あるいは（論理學及び自然哲學を含めて）『エンチュクロペディー』全體が（神の）現象學になり、そして現象學と現實學（であるべきもの）とが全く論理學（本質學）に還元されているのである。ヘーゲルにおいては現實學と本質學と意識學とが結局において一つになつている。そしてこのことを可能にしたものが絶對知、學への道としての精神の現象學の終端が絶對知であることなのである。正にこの絶對知が一方において存在論・形而上學としての論理學を可能にすると共に、他方において現象學を學そのものとして且つ逆に學そのものを現象學として可能にしたのである。絶對知がなければ學そのものが現象學にならない。

意識學としての現象學は發展の全範圍における眞理を意識の立場から見たものである。その限り現象學は論理學または『エンチュクロペディー』と範圍を同じくする。相違はただ現象學における眞理が意識に對してのものであるに對して、論理學における眞理がそれ自體におけるものであるということにあるだけである。卽ち兩者の相違は、範圍の相違でなくて、存在樣式の相違である。學への道としての精神の現象學も、ヘーゲルにおいては、絶對知に終る現象學、神・絶對者の現象學であることによつて、それ自體における眞理としての論理學とその範圍を同じくする。然るに學そのものの一部としての現象學は、それ（眞理）がいかなる存在樣式のものであつても、全眞理を對象とするのではなく、單に眞理の一部を對象とするに過ぎない。それは論理學、自然哲學から區別されるのはもちろんのこと、精神哲學のうちにおいても、一方人間學から區別されると共に、他方心理學、及び客觀的精神・絶對的精神から區別される。三つの現象學のうち、意識學としての現象學と學への道としての現象學とは存在樣式は異にするが範圍は同じくし、等しく全眞理であるに對し、『エンチュクロペディー』における現象學は前二者のいずれとも存在樣式を異にし、しかもその存在樣式のために範圍も異にし、單に眞理の一部を對象とするに過ぎない。現象學の三重性格といつても、第一と第三とはただ性格を異にするだけであり、第二はさらに兩者と範圍をも異にする。

(1) Th. L. Haering: Hegel, sein Wollen und sein Werk, II. Band, S. 484–485.
(2) 初期のマルクス、とくに彼の『ヘーゲルの辯證法及び哲學一般の批判』("Kritik der Hegelschen Dialektik und Philosophie überhaupt") は單にヘーゲルの『精神の現象學』の解釋及び批判として、唯物論の立場からのヘーゲル研究のために、さらに一般のヘーゲル研究のために、大きな意義をもつているだけではない。唯物論者のヘーゲル論理學研究にしても、論理學と精神の現象學との關係を究明して始めて結實するであろうが、マルクスの右の書物は單に『精神の現象學』の研究として價値あるだけでなく、論理學の研究もそれと直接結びつき、またそれを前提して行われなければならない。
(3) Th. L. Haering: Hegel, sein Wollen und sein Werk, II. Band, S. 484–485.

三　人間學の對象

——心または自然精神——

ヘーゲルの體系のなかで人間學が取り扱われているのは『エンチュクロペディー』における精神哲學のなかの主觀的精神の第一段階においてである。從つて『エンチュクロペディー』全體において見れば、人間學はそれ自身は精神哲學の領域に屬しつつも、自然哲學と精神哲學との中間・媒介、前者から後者への移り行きをなしている。人間學の對象はヘーゲルによれば心(Seele)であり、彼はまたこれを自然精神(Naturgeist)ともいつている。然らば心または自然精神とは何であるか。それを知るために我々は次にまずヘーゲルにおいては精神とは何であり、それから主觀的精神とはどのような精神であるかを振り返えつて見よう。

まず精神哲學とは、論理學が理念そのものの學であり、自然哲學が自己の他在のなかにある理念の學であるに對して、自己の他在から自己自身へ還歸する理念の學である。

ところが自己の他在から自己自身へ還歸する理念としての精神はさらに自己内において三つの發展段階を經過する。[1] 第一は自己自身に對する關係において存在する精神であつて、この關係の内部で理念の觀念的全體性が精神自身に

とつてでき上る、卽ち精神の概念であるものが精神に對して顯わになり、精神にとつては自分の存在は自分の許にあるということ、卽ち自由であるということなのである。そしてこれが主觀的精神である。それに對して客觀的精神とは、精神によつて作り出さるべき・且つ精神によつて作り出された世界としての實在態という形態において存在する精神であつて、この世界においては自由は現存する必然態として存在する。

ヘーゲルによれば理念とは主觀と客觀・概念とその實在態の同一性である。從つて精神一般が、いな自然がすでに理念である。然しヘーゲルは精神は差し當りは單に理念の概念に過ぎないと考える。從つて主觀的精神とは單に精神の概念に過ぎず、まだ實在態・自己の概念にふさわしい實在態をもたず、實在態を與えられたもの・自然としてもつており、さらにそれ自身が自然的に規定されている。それに對して客觀的精神は實在態を精神によつて作り出さるべき・且つ精神によつて作り出されたものとしてもつている。ところが客觀的精神においてはこの實在態は必然態の形態において存在している。從つて客觀的精神においては概念の實在態がまだ概念にふさわしいものとなつていない、あるいは概念はまだふさわしい實在態を自己に與えていない。從つて客觀的精神においてはまだ概念とその實在態との不一致が見出される。

かくて主觀的精神も客觀的精神もなお有限である。それに對して絕對的精神は精神の客觀態と精神の概念（または精神の觀念態）との統一のなかに存在する精神であり、しかもこの統一は絕對的なものであり永遠に自己を產出するものである。從つて絕對的精神は自己の絕對的眞實態のなかにある精神である。絕對的精神においては概念と實在態との統一が實現されているから、絕對的精神は無限な精神である。(2)

主觀的精神とは單に個人的觀念的精神という意味ではない。主觀的精神もまた理念として、概念とその實在態との統一である。ただ主觀的精神は觀念的であるためにその概念は自己の實在態を自己の外に・他者のなかにもつており、またそれ自身が外面的直接的な實在態である。

主觀的精神が正に主觀的といわれるのは二つの意味においてである。卽ち、一つはそれ自身が觀念的であつて實在態を外面態・自然においてもつているという意味においてであり、他はそれ自身が外面的自然的に規定されているという意味においてである。そして後者の意味こそ主觀的精神を正に心として、卽ち自然精神として規定するところのものであり、それが主觀的精神の直接態、人間學の對象を形成するのである。

ヘーゲルは主觀的精神をさらに次の三段階に別けている。第一は卽自的または直接的な精神であり、このような精神が心または自然精神であり、これが人間學の對象をなす。第二は對自的または媒介されておる精神であり、自己と他者との同一への反省として存在する。この精神は對向關係または特殊化における精神、いいかえれば意識であつて、これは精神の現象學の對象である。第三は自己を自己自身のなかで規定する精神、卽ち主觀そのものであつて、これは心理學の對象である。[3] 一言でいえば、精神の現象學の對象が自己とその他者との關係においてある精神であり、心理學は對象として他者をもたず自己を自己自身のなかで規定する精神であるに對して、人間學の對象は他者を對象としてもつているのでもなければ、また自己を自己のなかで規定するのでもなく、直接的に、つまり自然によつて規定された精神である。そしてヘーゲルにおいては正にこの人間學が單に自然哲學から精神哲學への移行をなすだけでなく、それ自身が精神哲學の始まりをなすのである。

かくて心または自然精神とは、意識のように他者（自然）を對象としてもつている精神ではなく、また客觀的精神のように自然を自分が作り出すべき・または作り出した實在態としてもつているのではなく、さらに主觀そのもののように主觀のなかに止り且つ主觀のなかで自分を規定する精神でもない。心とは自然によつて規定され、自然を基體とした精神である。ヘーゲルの人間學の對象たる心がこのような自然精神であることがヘーゲルの人間學の特色をなし、そこにまたそれが現象學・心理學と異るゆえんがある。

ヘーゲルは心そのものをも三段階に別けている。第一は單に存在するだけの自然的心であり、第二は感ずる心であ

り、第三は現實的心である。(4)

自然的心はさらに自然的質・自然的變化・感覺の三つに別れている。

そして自然的質は人間の普遍的遊星的生活（とくに宇宙的生活）、特殊な自然精神（大陸の區別及び人種の相違）・地方精神（民族性）竝びに個別的主觀（個人及び家族の氣質・才能・性格・骨相學・人相學・性向・個人的好惡）に關連する。(5) ここで取り扱われる精神は主觀的とはいつても絶對に個人的なものではない。自然的質において取り扱われる個別的なものはただ（個人及び家族の）氣質・才能・性格・骨相學・人相學・性向・個人的好惡だけである。然しこれらも自然的に規定されたものと考えられている。(6)

それに對し自然的變化は個人に卽して現われるものである。ヘーゲルはここに屬するものとして、年齢の經過・性關係・睡眠と覺醒との區別をあげている。このうち性關係はもちろんただ一人の個人だけで全體性を形成するものではない。然し性關係はもちろんのこと、年齢の經過や、睡眠と覺醒との區別も、自然によつて規定されたものである。

主觀的精神が個人的精神となるのは、自然的心のうちの感覺、竝びに感ずる心や現實的心においてである。然しこの際にも精神は常に自然によつて規定されたものと考えられている。そして個別化された自然とは身體である。人間學は宇宙全體から身體に到るまでの自然によつて規定された精神を對象とする。

ヘーゲルの人間學における心または自然精神は主觀的精神といつても、同じく主觀的精神たる意識や精神と違つて觀念的ではなく、また差し當り個人的でもなくて、正に自然的實在的肉體的であり、しかも最初に普遍的（宇宙的、普遍的遊星的でさえ）であり、次に特殊的（大陸・人種や民族の區別）であり、最後に個別的である。現象學の意識や心理學の精神における個人性や觀念性は人間學における心または自然精神の普遍性や實在性の發展として考えられるものである。人間學の當初の規定は普遍性であり實在性である。

（未完）

（1） Hegel: Sämtliche Werke 10 (System der Philosophie III) (Glockner Ausgabe) S. 39.

船山信一譯『精神哲學』（ヘーゲル全集――岩波書店――三）九―一〇頁

（2）ヘーゲルは「精神の概念は自己の實在性を精神においてもつている。」（ibid; S. 446. 同上譯書二九五頁）といい、また「精神の實在性が始めてそれ自身觀念性であり、かくて概念と實在態との絶對的統一、從つて眞實の無限性が起るのである。」（ibid; S. 44.）といつているが、絶對的精神とはこのことが完全に實現されている精神にほかならない。

（3）ibid; S. 46. 同上譯書一三―一四頁

（4）ibid; S. 60. 同上譯書二一―二二頁

（5）ibid; S. 63, 70, 78. 同上譯書二三頁―二四頁、二五頁、二六頁

（6）ヘーゲルは論理學において客觀的論理學における本質（實體）から主觀的論理學における概念へ移行する際に普遍性の契機から出發して、次に特殊性の契機へ進み、最後に個別性の契機へ到達し、しかも個別性を普遍性と特殊性との統一としてとらえている。ヘーゲルが精神哲學の最初の段階たる人間學の自然的心における自然的質において普遍的遊星的生活→特殊な自然精神・地方精神→個別的主觀の過程を取り、その個別的主觀からその後の段階（自然的變化・感覺・感ずる心・現實的心・意識等々）へ進んでいることは、論理學における概念において普遍性→特殊性→個別性の過程が取られていることと密接に關連するものであろう。

（筆者　立命館大學文學部〔哲學〕教授）